國學院大學学術情報リポジトリ

Book Review : FUJINO Hiroshi, NISHIMURA Makoto (eds.), Decoding Adorno's Aesthetics : From the Concept of the Sublime to Contemporary Music and Art

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hashizume, Keiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000569

紹介

藤野寛・西村誠編『アドルノ美学解読　崇高概念から現代音楽・アートまで』

橋爪恵子

本著は、20世紀最大の思想家の一人であるアドルノ（Theodor W. Adorno）の美学に関する論文集である。本書の第一の特徴はその主題の多様さにあるだろう。アドルノ美学を抽象的に概観する研究（美学と倫理学の隣接を「包摂」批判として論じる藤野氏、芸術が持つ「仮象」と「真理」の二面性の内に形而上学との接点を求める杉内氏、カントとの比較を通してアドルノの崇高概念の両義性を論じる西村誠氏）から、音楽（表現主義から構成主義への「移行」が「転換」でもあることを論じた伊藤氏、不定形音楽の内にアドルノが見出した「必然性」が音楽論を超えた射程を持つことを論じた守氏、アドルノの音楽理論がそれ以後の楽曲に持つ有効性を楽理的手法で検証する西村紗知氏）・美術（モデルネ芸術の本質とその崩壊を〈モンタージュ〉の中に読み取る鈴木氏、アンガージュマンを現代の芸術状況と接続して論じる長氏）・自然（「自然美」と「文化」の関係を通して「自然美」の二面性とアドルノの歴史観を明らかにする府川氏）等の具体的対象を論じたものまで、アドルノ美学の幅の広さと可能性を見ることができる。

しかしもう一つの本書の特徴は、アドルノ美学の論文を単に集めただけのものではない点にある。それぞれの著者は同じ研究会のメンバーであり、多くの論点を共有している。例えば自然への着目は府川氏だけでなく、崇高を論じた西村氏及び自然支配を論じた守氏とも共通するテーマであり、伊藤氏、鈴木氏は研究会の講読書籍でもあった『美学講義（一九五八／五九）』を引用して論を展開している。

そしてとりわけ多くの論者が着目しているのが、部分と全体が生み出すアドルノの弁証法的関係である。部分が対立しながらも普遍妥当性とは別の全体性である「星位関係（Konstellation）」を形作るこの関係の典型をアドルノは美学に求めていたことを藤野氏は指摘している（26頁）。しかし同時にそれは、多様な論文を集めつつも関連しあう本書そのものを性格づける概念ともいえるのではないだろうか。

（A5判、二五二頁、花伝社、二〇一九年一二月発行、定価三〇〇〇円＋税）